

公明党会派議員研修報告書

令和元年度 第1回市町村議会議員特別セミナー

■日 程 令和元年8月1日(木)～2日(金)

8月1日 13:15～16:35

8月2日 9:00～12:20

■場 所 全国市町村国際文化研修所

滋賀県大津市唐崎2丁目13番1 TEL(077-578-5931)

■参加者 鬼頭 博和

谷平 敬子

■内 容

「講義 1 滋賀県の挑戦～みんなでつくろう！健康しが～」

講師：滋賀県知事 三日月 大造

【概要】

- ・三日月知事のプロフィールに始まり、京都生まれ、大津育ち、48歳で、全国の知事47人の中で若さは5番目、現在2期、6年目を迎えている。
- ・滋賀県と言えば琵琶湖、信楽焼、人口は1,420,080人で近年は外国人が30,000人増加している。
- ・積雪量は、伊吹山の11.82mで世界一である。また、平均寿命、健康寿命は全国で男性1位女性4位である。長寿の秘密はタバコ、お酒を飲む人が少ない。スポーツ、学習、ボランティアをする人が多いといった理由が挙げられる。
- ・生活習慣を支える生活環境も良い。仕事面では失業者が少なく労働時間も短い、県民所得が高く、高齢単身者が少ない等である。
- ・知事が大切にしている事は協働、対話、共感であり、その取り組みとして、県庁横の知事校舎を離れて県内各地の集落で短期間の居住生活をする事で、現地での体験や地域の方々との対話を通じて地域の魅力や過疎など、地域交流等の暮らしの課題を自分の目で確かめ実感することで、政策に活かしている。知事就任以来5年間で10回実施している。

【所感】

まずは、知事の素敵な名前にびっくりしました。またその名前にも負けない知事のフットワークに感動しました。「健康しが」に込めた思い、活力、持続可能性、自分らしさ、支え合いがいっぱいでした。私も市民の皆さんの声をしっかりと聞き、市政に反映していきたいと思えます。

「講義 2 人生100年時代とごちゃまぜ社会」

講師：社会福祉法人佛子園理事長 雄谷 良成

【概要】

社会福祉法人「佛子園」の理事長として障害者の働く場や、高齢者向けの介護施設など、たくさんの施設を立ち上げてきた雄谷さん、近年は年齢、性別、国籍、障害の有無にかかわらず様々な人々が、一緒に暮らせるまちづくりに取り組んでいる。佛子園周辺の地域住民の皆さんが共存するまちづくり、町おこしも手がけている。それら全てに共通する理念は老若男女、障害のあるなしにかかわらず、色々な人が楽しく生き生きと暮らせるまちを作ることである。石川県白山市、輪島市での取り組みについて具体例を聞くことができた。

退職後の居場所がない中高年の引きこもりは、全国で61万人もいる。昔は、多世代が関わって合ってまちができていた。今は各家族、個人の存在の重視で社会は分断されている。

人生100年時代、個人中心的プロセスから、地域中心のプロセスへと地域の流れを変えていくことが重要であると、雄谷氏は考えている。それが「ごちゃまぜ地域共生社会」の実現である。

【所感】

年齢に関係なく、集える居場所づくりは、すごくいいなと思いました。岩倉市でも、南部憩いの家、さくらの家がある。若い人から、中高年の人まで、幅広い年代の人々が集える場所にしていけることが、大切ではないかと思いました。

「講義 3 スポーツツーリズムを活用したまちづくり～スポーツがもたらす地域活性化の効果～」

講師：同志社大学スポーツ健康科学部教授 二宮 浩彰

【概要】

初めにスポーツ消費者についての説明がありました。スポーツ消費者とは、スポーツに関わって、時間、金銭、労力を費やすことによって、スポーツから便益を得る購買者、参加者、観戦者、支援者のことである。近年このようなスポーツ消費者が、女性や若者を中心に増加している。

また、日常生活圏外の場所に一時的に滞在してスポーツに関わる活動をする、スポーツツーリストについても説明があり、「する」スポーツ、「観る」スポーツ、「支える」スポーツの3タイプがあり、それぞれの人々がスポーツに関わりを持ちながら滞在している。スポーツツーリストが訪れる魅力的な場所が、スポーツデスティネーションと呼ばれており、近年は外国から多くのスポーツツーリストが北海道のニセコスキー場などに訪れている。

最近では、ジョギングやマラソンの参加者が増加し、全国では約2000万人に昇っている。東京マラソンの参加倍率は約12倍で、都内にはマラソングッズの専門ショップやランニングステーションと呼ばれる施設が多く出店し始めている。2016年には、フルマラソンの大会が全国で164大会開催されており、そのうち7000人以上の参加者がある大会は、44大会もあるそうである。

【所感】

スポーツに対する新しい見方を学ぶことができました。スポーツによる経済効果が、地域の活性化につながり、まちづくりにとって重要な一面であることに気づかされました。しかしその反面、開催に際して、自治体の負担も増加するので、開催については、慎重に検討する必要があると思います。質問の時間で、小さなスポーツイベントは地域活性化に繋がるのか、といった質問が出ました。答としては、小さなイベントであってもやり方を工夫することで、十分効果が出るということでした。岩倉市で行われている市民マラソンも、現在は距離を短くしての開催であるが、以前のような規模で開催することも、今後の検討課題であると感じました。

「講義 4 関係人口の作り方 ～ぼくらは地方で幸せを見つける～」

講師：月刊「ソトコト」編集長 指出 一正

【概要】

関係人口とは、移住した「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域と多様に関わる人々を指し、自分のまちのように、そのまちを重要視する人々である。

今回は、指出氏が関わった事例を紹介し、関係人口が地方を再生する一つの役割として機能したことを説明して頂いた。

一つ目は、奈良県下北村である。人口800人の村に20人ほどの若者が2泊3日で、地域の人々や暮らしに関わり、林業が減少する中で、若者の視点で林業の再生を目標に新しい事業を起こすまでになったこと。また、スポーツ設備が充実している事の良さを発見し再び東京や大阪に戻って下北村のPRイベントを定期的に行っている。この様な人々が、現在でも村の活性化に大きな影響を与えている。

もう一つは奈良県天川村である。名前の通り天の川がとてもきれいに見える村である。ここに、名古屋から10人の若者がやはり2泊3日でとずれ、それぞれのメンバーが自分なりに地域貢献を考えた。2人の若い女性が一夜限りのスナックを開店、多くの地域の方がやってきて大変盛り上がり、その後も、定期的にスナックを開店するという継続的な地域貢献を行っているようである。

今の若者は、ローカルがかっこいいそうである。今まで経験したことのないような、地方の暮らしや文化にとっても関心があるようで、そういった思考が地方に光を当てる一つの起爆剤になっているのかもしれない。

最後に関係案内人のいる関係案内所となる場所の設置が必要であると、指出氏は主張されました。関係案内所とは、地域の面白い人に出会えるホットスポットや、こんな役割が地域に求められていると伝えるような、関わり方を案内する機能を果たす場所である。この様な場所を作ることによって、関係人口は増加するそうである。

【所感】

関係人口という新しい概念が、地方創生の一つのヒントになりそうな気がしました。お金をかけて人を集めるより、この様な地道な方法で人々を引き寄せ、やがては定住につながるような施策

が岩倉市でも必ずできると思います。今回の研修をきっかけにして関係人口の作り方を様々な角度から考えていきたいと思いました。岩倉の魅力は、岩倉にいる人にはなかなか気づかないかもしれません。若者の視点で、岩倉の魅力を再発見してもらえるような取り組みが必要であると感じました。